# 令和５年度　第２回岐阜県生涯学習審議会　議事録要旨

## １　日時

令和６年１月３０日（火）１４：００～１５：５０

## ２　場所

岐阜県庁２０階　２００４会議室

## ３　出席者

委員の現在数１３人　出席者１０人

＜委員＞

| | |
|---|---|
| 委員 | 浅野　欽一郎 |
| 委員 | 浅野　教史 |
| 委員 | 衣斐　淳美 |
| 委員 | 奥村　佳子 |
| 委員 | 小林　由紀子 |
| 委員 | 小山　真紀 |
| 委員 | 髙橋　幸平 |
| 委員 | 堀江　弘美 |
| 委員 | 米原　木ノ実 |
| 委員 | 若岡　ます美 |

＜事務局＞

| | | |
|---|---|---|
| 環境生活部 | 次長 | 高橋　一雅 |
| 環境生活政策課 | 課長 | 森　祥一 |
| | 生涯学習企画監 | 安藤　由美子 |
| | 生涯学習係長 | 久留　亜理子 |
| | 主査 | 竹内　洋平 |

## ４　報告

**（１）令和５年度の生涯学習関連事業実績について**

事務局：　事業実績について説明

（質疑等特になし）

**（２）岐阜県生涯学習振興指針に係る庁内関連事業について**

事務局：　庁内関連事業について説明

（質疑等特になし）

髙橋会長：事務局においては、事業を着実に進めていただきたい。

## ５　議事

**地域づくり型生涯学習を通した学びと活動の循環づくりの実践について**

**実践発表①「生涯学習としての取り組み」をテーマに実践発表（奥村委員）**

髙橋会長：　奥村委員の発表をうけて、各委員よりご意見をたまわりたい。

浅野教史委員：　居場所を作る人がいるということは、地域の人にとって幸せなことである。船頭鍋のような、なくなっていきそうなものを掘り起こすなど、子どもにと

ってもいい経験になったと思う。

小山委員： オンラインでの動画発信はあるか。

奥村委員： YouTube で配信したが、あまり再生されない。

小山委員： 一人が悩んでいることは、みんなに共通する悩みであることが多い。普段から横のつながりで共有して一緒に解決できないかと考えている。

奥村委員： お母さんたちと話していると、解決にならなくても心が軽くなり、それで安心することもある。この会のように、いろいろな場で活躍されている方と触れ合うことで新たな発見がある。まさにこれこそが生涯学習であると思う。

堀江委員： セミナーなどの活動になかなか人が集まらないという実態があると思うが、どのように働きかけているか。

奥村委員： 集客は発信も大事だが、それだけでは難しい場合が多い。つながりを生かして、まずは個に働きかけることが必要である。そこから新たなつながりを生み出していく。

堀江委員： 郷土愛というテーマにおいて、「食」があることでつながりやすくなっていると思う。

米原委員： 笠松町の文化を知るという１つのテーマも、こんなに素敵な活動につながるのだと思った。

若岡委員： 何歳になっても居場所は必要である。行政の企画では参加者が限定されてしまう場合があるので、多くの人に向けての窓口を提供したいと考えている。待っているだけではなく、働きかけというアウトリーチ型の支援を大切にするという両輪が必要である。自分はネットワークをキーワードに活動しているが、どのようにつながりを広げているか。

奥村委員： アウトリーチ型支援は、相手と理解し合う必要がある。また、費用が発生することもある。どうやって活動していくのがよいか、模索しながら取り組んでいる。まずは、できることからやるしかないので、信頼を得るためにメディアを活用している。現状の問題を解決するためには、個では限界があると感じている。地域の力などの横のつながりを巻き込んでいかないと、課題解決には至らない。また、問題解決のスピードよりも早い速度で社会が変わることもある。子ども食堂などの世の中のニーズと合うと解決が早いので、ニーズに合わせて母親支援を広げていきたい。

小林委員： 母親支援という言葉が響いた。笠松町で環境学習の授業を行ったとき、笠松町の方々は仲がよいと感じた。こういった活動があるからだと分かった。

衣斐委員： 行政だけではネットワークが限られてしまうので、いろいろな主体での活動が必要であると思った。「よりどころ」があれば、いろいろな世代の方々が、安心して暮らしていけるのではないかと思った。

浅野欽一郎委員： サポートを望んでいる人がどのくらいいるか。そして、その方々をどのくらいカバーできているか。また、その方々と奥村委員の取組はどうつながって

いくのか。

奥村委員：　母親は保育園に預けるまでの間が一番つらい。退院してから、全員がすぐに困る。そこでサポーターがいるかいないかが大きい。退院後のサポートをこちらから働きかけて、自宅へ訪問している。数ヶ月後に地域のつながりができるまでサポートする。チームでアウトリーチ型の支援を年間 150 件くらい行っており、よりどころにしていただいている。行政にもサービスがあるので、保健師に伝え、橋渡しをしている。小さくつながっていくことが支援を進める下支えとなる。

髙橋会長：　何人くらいの仲間で取り組んでいるか。

奥村委員：　10 年くらいの間、10 名程度で活動を行っている。

髙橋会長：　子どもたちがすくすく育つには、母親への支援は必要である。地元の「食」の話もあったが、活動を通して笠松町の方々は、地元を愛していると実感することはあるか。

奥村委員：　みなさん地元を知りたい、愛したいと思っていると感じる。SNS の情報発信も有効だが、地元の方の話を聞くことが問題の解決に重要だと思う。ようやく母親支援の必要性も理解されてきた。

小山委員：　同じような活動をしている団体との横の連携はあるか。

奥村委員：　他県も含め、横のつながりもある。

小山委員：　父親のつながりはあるのか。

浅野教史委員：　なかなかないのが実態である。ぜひ理解を広める場を作るとよい。

**実践発表②「「個人の学び」を「循環」の輪の中に置いたとき得られた気づき」をテーマに実践発表（米原委員）**

髙橋会長：　米原委員の発表をうけて、各委員よりご意見をたまわりたい。

浅野欽一郎委員：　子どもたちはどんなことを感じて話を聞いていたと思うか。

米原委員：　創作話なのでハードルが高いと思ったが、子どもたちの心に何か残ればと考えた。何回かストーリーテリングを続ける中で、人の話を聞く力が身についてきていると感じている。将来的に一人読みへの橋渡しになればと思い、活動を続けている。

衣斐委員　今は勝手に情報が入ってくる時代だが、読み聞かせは自分から聞くという姿につながる。自分も学校に読み聞かせに行くこともあるが、絵本を比べるという考えはなかった。学校以外で話をすることもあるか。

米原委員：　社会福祉施設などでおはなしをすることもある。その場合は、逆に昔話を教えてほしいとこちらがお願いしたいくらいだ。

奥村委員：　昔話を聞くことで、自分の小学校の頃をイメージすることができた。誰かの気持ちになって考えるということはとても素敵なことである。

米原委員：　「居場所」という話があったが、家で読み聞かせをしてもらっている子ばか

りではないという実感がある。肉声で伝えることが大切だと考えている。

小林委員：　自分も授業の中で本の読み聞かせをすることがあるが、みんな食い入るように見ている。顔を見ながら肉声で語る大人がたくさんいるとよいと思う。自分も授業後に子どもの感想を聞くと、自分が与えたよりも多くのものをもらえることがある。ずっと続けてほしいし、保護者にも読む喜びを伝えてほしい。

若岡委員：　貧困の子どもたちや海外の子どもたちにもストーリーテリングはすごく大切であり、肉声で語ることでイメージを膨らませている。海外では戦争中でも子どもたちは身を寄せ合って絵本を読んでいて、絵本の力を感じる。絵本を読んだことのない子どもたちに、本を買う機会を与えても自分で本を選ぶことができない。格差社会の中であるが、多くの子どもたちが小さいころから読み聞かせを経験できないかと思う。

米原委員：　聞き手の解釈一つで全然違う理解が生まれる。いろいろな受け取り方をすることが大切だと思う。

堀江委員：　自分が絵本を聞かせていただく経験はないので、リラックスして、集中して引き込まれていく絵本の心地よさを感じた。人間関係の基本は傾聴することだと思う。文学的な本を聞くことで、聞く力もつくのではないかと思う。

米原委員：　おはなしを聞いてもらうことは難しいことだが、あえてスキップも早送りもできない時間をもつことが大切だと思っている。

小山委員：　情報を遮断するため、目をつぶってイメージして聞いていた。文章だけだと自由がある。解釈が違っても何が正しいというものはなく、自由な解釈でよい。人の解釈を聞くことで他者の価値観も尊重することができるのではないか。そうすることで、新しい着眼点が見えてくる。動画や映像化など多くされている中で、思考が自由になる機会が減っているのではないかと思った。

米原委員：　子どもたちも、いつまでも覚えているのは絵本ではなく、ストーリーテリングでのおなはしであったりする。一度自分の頭の中で映像化したものは、後から思い出しやすいし、そこから影響を受けることもある。

浅野教史委員：　絵本を読み聞かせることはあるが、読み比べてから話すということはなかった。普段、子どもたちは目をキラキラさせながら聞いている。まだ字が読めない子どもたちも、本をめくりながら自分で作って話をする。絵を読んでいるのだと思う。子どもたちの想像の世界があるのだと思う。また、同じ本を何回も読むが、毎回違う味わい方をしているのだろう。母親による読み聞かせの会では、子どもたちは大喜びだった。いろいろな人の語りを聞くことも楽しいのだろうと思う。

米原委員：　集団への読み聞かせは「個人対集団」だが、ストーリーテリングは語り手と聞き手の１対１でつながるものがあると感じる。今回、子どもの前に立つという生涯学習の循環の輪の中に自分の身をおくことで、自分の仲間うちだけ

では得られなかった気づきを得ることができた。今からでも学ぶことがあるということは幸せだ。人生100年時代の学びという体験であった。意図したものは失敗し、意図しないものが成功する。意図しないものに恵みがある。人と関わり、生涯学習の循環の輪の中に入ることで新たな学びがある。

髙橋会長： 子どもたちは目を見て聞いているか。

米原委員： 目を見て聞いてくれるようになった。そして目は合っていながらも、おはなしの中の情景を見ているのだと感じている。

髙橋会長　委員の方々の話から、いろいろなアプローチの仕方があることを感じた。

## ６．その他

小山委員： 庁内事業について分野別施策があったが、この分野とつながりたいと思ったときにすぐに探せるようMAP化等を考えてほしい。

髙橋会長： 検討をお願いする。

〔以後、事務局に司会進行を戻す〕